第45回 わたしからの人権メッセージ

2024年度　特選作品集

堺市人権教育推進協議会

第45回
わたしからの人権メッセージ
特選作品集

「わたしからの人権メッセージ」発刊にあたって

堺市人権教育推進協議会では、人権を守り、平和で差別のない明るい都市をめざして、市民主体の活動を進めています。その一つが、本年度で第四十五回を迎える「わたしからの人権メッセージ」です。多くの市民の皆様が日常生活の中の人権問題に関心を持ち、自ら考え綴ることによって人権についての認識と理解を深め、さらに作品の共有を通して広く人権啓発につなげることを目的として実施しています。

今年度も、私たちの呼びかけに幅広い年齢層の皆様から、数多くのメッセージを寄せていただきました。作品を応募していただきました皆様に心からお礼を申し上げます。厳正なる審査の結果、優秀な作品二十点を特選作品とし、ここに、「わたしからの人権メッセージ」特選作品集として発刊します。

人権が尊重され、安心して暮らすことのできる平和で差別のない社会を実現することは私たちにとって共通の願いです。しかしながら、人権を取り巻く状況を鑑みますと、女性や子どもへの暴力や、外国にルーツを持つ方、性的マイノリティの方や障がいのある方への偏見や差別、インターネット上での他者への誹謗中傷や差別的な書き込みなど、人間の尊厳を侵

害する事象は後を絶ちません。また、世界では、多くの人々の尊い命が戦争や民族紛争等により失われています。

そのような中、堺市では市政運営の大方針である「堺市基本計画二〇二五」において、「すべての施策を平和と人権を尊重する視点をもって進める」と示した上で、令和4年度から5年間を取組期間とする「第3期堺市人権施策推進計画」を策定し、人権が尊重される社会の実現に向けた取組を総合的に推進しています。

本協議会におきましても、市と連携し、人権意識の向上と確立に向けた啓発活動をさらに進めたいと考えています。

最後に、本冊子が、一人でも多くの方々に愛読され、私たちの身近にある人権問題を考えるひとつのきっかけとなり、私たちのまち堺から、人権文化の花を咲かせる一助になることを期待しています。

二〇二四年十二月

堺市人権教育推進協議会
会長　金　丸　尚　弘

もくじ

□勉強したくても出来ない子達がいる …… 1
□「自分のその目でたしかめて」 …… 3
□知ってほしい色覚異常 …… 5
□かみが長い子は女の子 …… 7
□ばあばの名前 …… 9
□小さいけど鋭くて痛い言葉 …… 11
□人はたった一つの努力で救われる、の積み重ね …… 13
□「いじめはなぜなくならないか」 …… 17
□「言葉とは」 …… 19
□弟の成長で感じた性別による偏見 …… 21

□辛いときこそ言えない思い　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
□天災とマイノリティ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
□「小さな差別」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
□親からの花丸　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
□「子どものための社会」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
□私がレインボーパレードで叫ぶわけ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
□「祖父」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
□『まずは考えてみた』　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
□同和問題に向き合う私たちの責任　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
□全ての人が尊重される世の中を目指して　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47

※御本人の許諾の得られたものを掲載しております。

勉強したくても出来ない子達がいる

小学校四年　上島柚月（うえしまゆづき）

私の将来の夢は弁護士になることです。弁護士になるにはたくさん勉強しなければならないので、私は毎日一生懸命勉強しています。難しい問題に当たるとわからなくて泣いてしまうこともあるけど、私は勉強することが好きなのでもっともっと色々な問題にチャレンジしたいと思っています。お友達の中には勉強が嫌いな子もいます。勉強は苦手だけど、運動が得意な子もいます。絵が上手い子もいます。みんなそれぞれ得意なことや好きなことを頑張っていくのが良いと思うけど、様々な理由でそれが出来ない子達がいるとニュースで観て知りました。

ニュースは「子供の教育格差」ということについて特集されていました。「格差」って何だろう？と思った私はお母さんに聞いてみました。格差というのは違いがあることらしく、最初はみんな好きなことが違うという意味かな？と思いましたが、そうではなくて子供が育つ家庭環境の違いだと知りました。お父さんかお母さんのどちらかしかいない家庭や、何かの事情で親が働けなかったりする家庭で育つ子供は習い事や塾に行けなくて色々な体験や勉強が出来ないという内容でした。

私は塾に通ったり習い事などをしたりしています。お休みの日はお父さんがプール

に連れて行ってくれたり、お母さんがお料理教室に連れて行ってくれたりします。そのひとつひとつにお金がかかることを何となくはわかっているけど、あまり深く考えたことはありませんでした。でも私が何も考えず続けて来たことを、やりたくても出来ないお友達がいることを初めて知りました。ニュースでは子供はみんな平等に学ぶ権利があるけど、現実は平等じゃないと言っていました。そしてその差を埋める為に、無料の塾を開いて子供達に勉強を教えている人達がいると伝えていました。私はすごく良い事だと思ってお母さんに話しましたが、お母さんはとても良い活動だけどそんな活動をしている人達はまだまだ少ないし、本当に解決する為にはたくさんの人達の協力やお金が必要だと教えてくれました。実際にはお勉強する環境も何かを体験する機会もない子供たちがまだまだたくさんいると知って私はショックでした。

私は初めて夢に向かって勉強出来ることは幸せなことだと気づきました。いつか私が大人になって夢を叶えた時、子供が夢に向かって好きなだけお勉強をすることが出来る、そしてお勉強だけでなく様々なことを体験出来る、子供がみんな平等で幸せな社会を作るために精一杯働こうと強く思いました。

「自分のその目でたしかめて」

小学校五年　奥田（おくだ）　硯（すずり）

「差別のない世界をつくろう」。これは、世界中で言われている言葉です。人種の違いを理由とした差別は歴史が古く、植民地支配が始まる前から行われていたそうです。そして今も「人種」や「性別」などの違いを理由とした差別行為が繰り返されていて、不平等な扱いを受けている人々が存在しています。

差別とは何なのか？何がきっかけで始まるのか？なぜ、なくならないのか？ぼくにはわからないことが沢山あります。

図書室で『アンネの日記』という本を読みました。そこには、想像もできないほどの悲しい日常が書かれていました。生きていること、生まれてきたことさえ罪であるかのような扱いで多くの人が自由に生きる権利を奪われていました。そして、そんなおかしな考えに人々が共感していた時代だったと書かれていました。ただ人種が異なるというだけの理由で多くの人が支配され、自身との間に差を作ったのです。きっと好きな食べ物が同じだったり、気の合う仲間もいたはずです。自分の目で見たことや感じたことではなくて、「○○はこういうもの、○○すべき。」という他者の意見をそのまま信じてしまったことが差別の始まりだったのかもしれないとぼくは思いました。

ぼくが休みの日にお母さんと一緒に自転車でパン屋に行った時のことです。道は狭く車も多いところに、反対側から怖そうな外国人のおじさんが来ました。両脚にはタトゥーがびっしりと入っていました。お母さんは自転車の運転が未熟なぼくを気にかけて、先に行かせてもらえるよう相手の人に会釈をしました。すると、道を譲ってくれたにもかかわらず、姿勢を正してとても丁寧なお辞儀を返してくれました。その時に気がつきました。ぼくも知らず知らずのうちに「〇〇っぽい、〇〇した方がいい。」と、自身の体験で得た価値観ではなく、人から聞いた話や見た目を基準にその人を判断していたのです。もしかすると、今も残る差別のほとんどが、ぼくと同じように誰かの経験や考えが一人歩きしてみんなの心に根付いてしまったものかもしれません。苦手だった野菜が少しのきっかけで食べられるようになったり、知ることによって今までとは見方が変わり避けてきたことに興味を持ち始めたりすることがあると思います。そんな風に自分自身の目で実際に確かめて感じたことを信じていけば少しずつでも意味のない差別がなくなるとぼくは信じています。

知ってほしい色覚異常

小学校六年

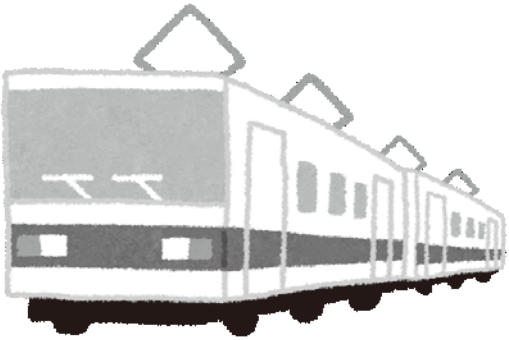
みなさんは色覚異常を知っていますか。「色覚」とは色を識別する感覚のことで、そこに異常があることです。例えば青とむらさき、黄緑とオレンジ、うすいピンクと灰色がぼくには見分けがつきにくく、そのため正常な見え方とは少し違います。

ぼくには先天性の色覚異常があります。小学校一年生の時に眼科で検査した時に分かりました。兄にも異常があるのですが、兄が見間違える色がぼくは間違えない時もあり母もおどろいたそうです。そして先天性な色覚異常は、い伝性のため申し訳なく思ったそうです。でもぼくは、最近まで特に困ったことはありませんでした。家族と話をしていて、「この色はどう見えているの。」と聞かれ、自分と見え方が違う事を知りました。ぼくは青信号はなぜ青と言うのだろうと思っていました。ぼくは信号の青が白に見えているからです。でも光っている場所が分かるので判断は出来ます。

六年生になって図工の時に青色の所をむらさきだと思ってぬっていて友達が教えてくれました。人と見え方が違う事は困る事だと感じました。色覚異常は男性の２０人に１人の割合でいるらしいですが兄以外で出会った事はありません。色覚異常がある

となれない職業があります。人の命に関わる仕事です。ぼくは電車が好きです。将来は電車の運転士か整備士になりたいと思っていました。でも多分なれません。それでも電車に関係する仕事が出来たらいいなと思っています。

これから先も見え方は変わりません。自分の見え方がどんな風に人と違うのかを自分で知る事も大切だし、ぼくの様に色の見え方が違う人がいる事を、周りの人にも分かってもらえたらいいなと思います。



かみが長い子は女の子

小学校六年　山崎汐里（やまさき しおり）

みなさんはかみが長いと女の子なんだな、かみが短いと男の子なんだな、と見た目で決めていませんか？私の弟はかみを伸ばしています。大体女の子に見まちがえられます。弟は可愛いねと言われるのが好きなのでまんぞくそうですが、私はちょっと引っかかります。

なぜ人々は見た目や顔立ちで何もかもがわかったようにするのでしょうか。

私は気になりました。女の子はかみが長いのが当たり前、男の子はかみが短いのが当たり前というこの当たり前についてです。

まず初めに当たり前ってだれがきめたのでしょうか。日本の総理？リーダー？いいえ私はちがうと思います。なぜなら人々がみんなが言っているからみんなそうだからなど周りに合わせたもののかたまりだと考えるからです。

これは人間の悪いところだと私は考えます。確かに周りに合わせないといけない時もたくさんあります。ですが周りの人が言っているからと、自分のしたいことからにげるのはちがうと思います。それは「みんな」を理由にしてにげているだけと思うからです。

次にこの当たり前をくつがえすことはできるのでしょうか？私はこのことはとてもむずかしいことだと思います。いま人間の当たり前って私はお茶わんにたくさんの「みんな」と言うお米がのっていて、その周りに幕がはっているんじゃないのかなと私は思います。私はその幕をやぶってお茶わんをひっくり返してようやく当たり前じゃないことに気がつくのではないでしょうか。

ですがその当たり前をこわす人も必要なんではないでしょうか。それはいま私の作文をみているあなたがみんなのお茶わんをひっくり返してあげるといいのではないでしょうか。

次に私がかみをみじかくしたときのお話です。私はボーイッシュと言うかみがたにあこがれました。男の子っぽい服も着てみたいと思いました。かみを切った翌日学校に行くと、クラスの子たちに「男」と言うあだ名をつけられました。このあだ名はみんなのあたり前がつまったあだ名だなと思いました。自分は男の子ではないので自分がなんだかわからないひびがつづきました。そのとき、ＳＮＳで「○○は○○。性別などない」と弟にいっている姉がいたのをみかけました。それを聞いて私は自分が好きな自分でいようと思いました。

このようにあたり前をおしつけるのはよくないのです。そして私は何度でもいいます。この作文をみているあなたがだれかのあたり前をこわしてあげてください。すると声をかけてあげた人は生きやすくなるんではないでしょうか。

ばあばの名前

小学校六年　嶋橋由乃（しまはしゆの）

「李福生（リフクセイ）」これは私のばあばの名前です。私のばあばは韓国人です。

私は、夏休みにハギハッキョに参加しました。ハギハッキョは韓国・朝鮮にルーツがある子ども達が集まって自分のルーツにふれ、仲間と出会える場です。私は五さいの時と五年生の時、今年の三回参加しました。去年出来た友達と今年も会えて、ウリナラ（私達の国という意味で朝鮮半島を表しているそうです。）の遊びや勉強を通して、去年よりもっと仲良くなれ、中学生になっても、参加しようと約束しました。去年は遊んで楽しかっただけで、人権についてはハギハッキョと何がつながっているのか分かりませんでしたが、今年はくわしく勉強して、自分でも少し調べてみようと思いました。

ばあばにはもうひとつの名前があります。「髙橋美代子」です。ばあばはこの日本名を使っています。なぜ李福生、福が生まれるという良い名前なのに韓国の名前を使っていないのか、ばあばに聞いてみました。ばあばは小学生の時に名前でいじめられたので、日本名を作って使うことにしたと言っていました。

去年ハギハッキョに行ったことを日本人の友達に話すと、なぜ参加出来たのか聞か

れたので私のばあばは韓国人だと言いました。すると私の友達は「良いな」と言ってくれ、とてもうれしかったです。私の友達のような友達がばあばにいてくれたら、いじめられることもなく、韓国の名前を使えたのにと思いました。

日本には、ばあばと同じように社会的、歴史的な理由で日本名を持つ韓国・朝鮮の人達がたくさんいるそうです。その人達が胸を張って自分の国の名前を使える世の中になれば良いのにと思います。

小さいけど鋭くて痛い言葉

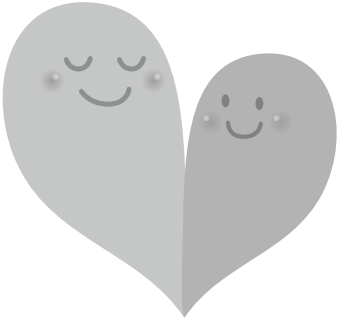
中学校二年　玉田叶帆（たまだかほ）

私はいつもテストで百点が取れない。得意な教科でも、一つや二つ間違えて百点を取ることができない。私はそんな時、「もったいない」と誰かに言われるのが怖くてしょうがない。私は自分の頑張りを誰かに見てもらうために勉強している。私は「頑張ったね」と言われたい。でも「もっと勉強していたらできたのに」なんて言われることだってある。確かに百点はすごい。でも九十点もすごいはず。私はいつも百点という完璧になることができない。

私はいつも、テストでも部活でも完璧になるために頑張っているけれど、完璧になれない。みんな私に完璧を求めるけど、求めてるそっちも完璧じゃない。ヒトはみんな完璧になれない。だから私は、完璧を求められて苦しくなっているヒトがいるのかもしれない、と思った。私は、完璧になれなかった誰かを責める人が嫌い。もっと、その誰かの心を知れば、自分も相手も楽でいられるはずなのに。ヒトの心は見て決めつけるものじゃなくて、見ようとして感じるものだと思う。ヒトの心は、体と違って存在しないし、一度壊れると中々なおせない。だからこそ心は「大切にするべきモノ」なんだと思う。

もし壊れてしまったヒトがいるなら、絶対に救わなければいけない。何億人がいる地球で、一人くらいどうでもいいなんて思考は許されない。全て救わなければならない命だ。それがヒトの持っている権利だから。

この話が人権に関わる内容なのか分からないけれど、少なくとも私は、「ヒトの心を傷つけない」ことが人権のひとつだと思っている。これからもそういう想いで生きていく。苦しんでいるヒトを一人でも救うために。



人はたった一つの努力で救われる、の積み重ね

中学校二年　尾之家彪（おのやたける）

僕は、小学五年生の三学期初めぐらいから、いつの間にか不登校になっていた。理由として、”いじめ“や”勉強が分からない“のようなものではなくて、単なる「不安」によるものだった。その「不安」によって、一日に二、三回腹痛が起こるようになってしまった。

社会では、不登校への対応として、いじめや勉強の面を解決していくような動きが最近多くみられる。もちろんそれも大事なことだが、そのうえで、僕はもっと、人の心に近づいて、ただひたすらに「大丈夫。」と言ってほしい。不安を感じる人は、人一倍敏感で、人の気持ちにとても気がつくから、すぐ気持ちが暗くなる。けれど、「大丈夫。」の一言を心から言い続けてあげると、不安な心にスッと優しい何かが入ってくることも気がついてくれる。そういう人だから。

五年生の三学期後半、鶴の折り紙が届いた。先生からもらった時、「本当に僕宛て？」と半信半疑の状態で受け取った。たくさんの友達が折ってくれていた。鶴の折り紙は、画用紙二枚分くらいに敷き詰められていて、いろいろな種類の折り紙が使われていた。一人ひとりの「大丈夫。」が心に少し伝わった気がする。

六年生になってすぐ、体育大会の練習があった。体育大会の半月ぐらい前に、ダンスの振り付けが新しい担任の先生から送られてきた。家で暇になったとき、振り付けを見ながらなんとなく踊っていた。

体育大会一週間ぐらい前に、当日の放送係を突然やりたくなり、次の日の放課後、先生に会いに行った。いざ学校に行ってみると、前と変わらないような風景で、どこか懐かしい感情に包まれた。自分の机の中には、授業のプリントがぎっしりと入っていた。ただ、そんなことでやる気を失うこともなく、当日の説明をよく聞き、着々と準備を進めていった。

体育大会当日、僕は校舎の三階で、放送の順番が来るまで競技を見ながら待機していた。みんな生き生きしていて、僕もいつの間にか踊っていた。また、「大丈夫。」が伝わってきた。

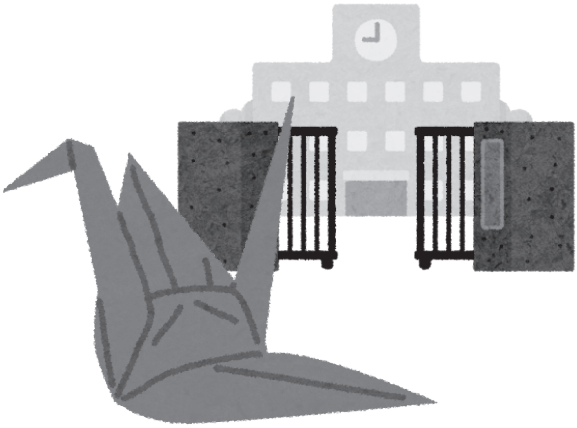
放送をする時が来た。その時にはもう、不安なんかなくて、ただ気持ちを弾ませていた。一回目は、あまり上手く言うことができなかった。でも二回目は、すらすらと言うことができた。とてもすがすがしい気持ちだった。

体育大会の閉会式が終わった。みんなが教室に戻った後、僕がサプライズ的な感じで教室に入る予定をしていた。その時まで、ドキドキしながら待っていた。

あっという間にその時が来て、教室に入ると、みんなが名前を大声で呼んでくれ、心に強く優しく「大丈夫。」が刺さった。みんなと一緒に写真も撮れて、最高の瞬間

になった。

僕はこの経験を元に、「どれだけ不安になっても、ただ一つの言葉を心から伝えられると、誰だって変われる」ということを強く実感し、それを一人でも多くの人に伝えられることを目標に、日々生きている。目の前にあるものは「あたりまえ」などではない。不安や安心は、人それぞれの、今までの努力があるから、僕たちは感じている。「努力」が、生きていける勇気を。



「いじめはなぜなくならないか」

中学校二年　長野友香（ながの ともか）

私はなぜいじめがなくならないのかについて自分で考えてみることにしました。そこで私が考えたのは、自分と違う部分などがあると人間はいじめてしまうのではないかと考えてみました。たとえば、顔のパーツや性格などです。顔のパーツや性格が自分と少し違ったりすると人間は友達などにも言い、それが広まりいじめに繋がるのではないかと考えました。

私は実際に顔のことについて言われたことがあります。それはとても辛くて、毎日学校に行くのが嫌でした。顔は簡単に直せるわけでもないので、私はどうすればいいのと毎日思いました。その時友達に相談して、先生にも言えて、私の顔について言ってくることはなくなりましたが、このことがあって分かったことがありました。それは、顔のことを言ってくることが終わったとしても、私の心にはずっと残っているんだなと思いました。自分ではあまり気にしていなかったのに、相手に言われてとても気にしてしまい、自信もなくなってしまいました。このようなことを言われ、コンプレックスになってしまう人もいるのではないかと思いました。いじめは暴力のイメージが強いが実際は言葉で傷つけることの方が多いと思いました。

なぜなら、暴力はいじめと分かった状態でするけど、言葉のいじめは、自分が思っていなくてもしてしまうことがあると思ったので、暴力よりも言葉で傷つけることが多く、自分が気にしていなくてもいじめになるかもというのを、だれもが気にしていかないとだめだなと思いました。

いじめをなくすことは難しいことかもだけど、いじめが少しでもすくなくなる方法は、あると思いました。その方法は、あたりまえですが、相手の気持ちになって自分が嫌だなと思うことは、しないこと、言わないこと、だと思いました。あたりまえだけどできていないのでいじめに繋がってしまうのだと思いました。あと、いじめだなと思ったり、見たりした時は、その友達によりそったり、先生に言うのもとても大事なことだと思いました。私が辛かった時も友達や先生に相談できてよかったし、とても気持ちが楽になったので、だれもが良い気持ちで過ごせるようになったらいいなと思いました。今、いじめをしている人や、いじめられている人、いじめを見ている人、いじめをしてしまっているかもと思っている人にこの作文がとどくといいなと思いました。私もだれかがくるしい思いをしていないか、周りを見て、いつもの様子をおぼえてすぐに変化に気付き、その友達によりそえる人になれたらいいなと思いました。

「言葉とは」

中学校二年　西口葵彩（にしぐち あおい）

言葉とは、意味を表すため、口で言ったり字に書いたりしたもの。

皆さんは普段、言葉を使って人とコミュニケーションをとっていますね。初めて会う人から、仲の良い友人、家族、先生たち等一日を通して沢山の人たちと私たちは言葉を使い会話しています。誰もが当たり前のように使っている「言葉」。

「ありがとう」「大好き」「凄い」「優しいね」。

今言った言葉は、言われた相手も嬉しい、優しい言葉です。こんな風に言葉は人を嬉しい、幸せな気持ちにしたり、人と人を繋ぐこともできます。けれど、その逆を言えば言葉は人を簡単に傷つける凶器へとなります。

「嫌い」「ウザい」「つまらない」「役立たず」「バカ」。

この言葉は、相手を傷つけたり、不快な気持ちにさせる「言葉」です。このような言葉の使い方は良くありません。小さい頃から、今にいたるまで、何度も大人から言葉の使い方について私たちは深く教えられてきました。けれど、皆が皆、言葉の使い方が上手なのかと言えば、そうではないと感じます。

実際に私は、こんな経験をした事があります。私は小学校中学年あたりからアレル

ギーやアトピーで周りに比べると肌が荒れていました。その時にある女の子から「肌荒れヤバイよ」とか、さらには、小学校高学年の頃にヘアアレンジしてみた時に同じ女の子から「似合ってないよ」と言われた事があります。周りの空気を崩したくないので、その時は笑って曖昧にやり過ごしますが、心の中では凄く傷つきます。本人からすれば、きっとアドバイスやなんとなくで言ったのでしょう。日頃からの様子で考えると、その子に悪意はなかったと思います。

このように、言った側からすれば「たったの一言」で、その言葉に悪意が含まれていなかったとしても、言われた側はその「たったの一言」で傷つくということも忘れないで欲しいんです。私自身も、きっと言葉で人を傷つけたことも、傷つけられたことも少なくはありません。

このようなことから、言葉というのは使い方次第で人を幸せにすることも、反対に人を強く傷つけることもできるものだと考えました。

私は将来、カウンセラーになりたいと考えています。そのためにも、人を幸せにする言葉の使い方をしたいです。自分の言葉に責任をもち、相手も自分も傷つかない言葉遣いをすることでよりいっそう一日を気持ちよく終えることができます。

これからも、誰もが当たり前に使っていく「言葉」。一人一人が言葉の使い方を改め、思いやった言葉遣いをしていけば、いじめの解消へと繋がっていくのではないでしょうか。

弟の成長で感じた性別による偏見

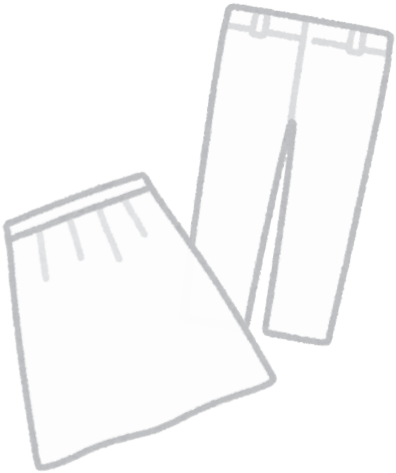
中学校三年　矢部悠花（やべゆうか）

今日の朝、私は新しいジーパンをうきうきしながらはいた。そして小さくなったジーパンは弟にあげることにした。その時、私はふと、「ジーパンは女でも男でもはけるからいいね」と言った。でもその後、私は自分の発言に疑問を持った。この言い方だと、まるで他の服は女だけ、男だけしか着てはいけないと言っているようなものではないか、と。でも確かに、私の中には、スカートでピンクは女、ズボンで黒は男などといったイメージがある。これはいったい、どこで生まれたのだろう。

思い返してみれば、弟がまだ3歳ぐらいの頃には、私のスカートやらレースのついたかわいいサンダルやらをはいては、ニコニコうれしそうに見せびらかしてきた。それが今はどうか、少しピンクの入った服を見せただけで、「女っぽいから無理」と言って見向きもしなくなった。いったいこの期間に何があったというのだろう。私は一つしか思い付かない。「学校」だ。学校にはいろんな友達がいるので、関わっていく中で男女のイメージの違いが生まれるのだろう。しかしそれだけではない。学校には、男女別の制服、赤と青で分けられたトイレ、男女別の体育など、男女で分けられたものがたくさんある。これこそが、性別によるイメージの違いを生む原因であろう。こ

の偏見が必ずしも悪いかは分からないが、少なくともＬＧＢＴＱの人達が生きづらさを感じる一因となっているのは事実だと思う。

最近、世の中は少しずつ変わり始めている。例えば、昔は大半が赤と黒だったランドセルも、今は実に様々な色のものを見かける。これは個人個人の男女の固定観念が薄れてきていることの表れだと思う。また、私の中学校では最近、男女で分かれていた制服が、どちらでも着てよいことになった。社会は少しずつＬＧＢＴＱの人々に歩み寄っている。これからもっとこういった取り組みが増えていき、どんな価値観を持った人でも生きやすい世の中になってほしいと思う。そしていつかは、ＬＧＢＴＱという呼び方がなくなるほどこの価値観が受け入れられるような世界をみんなでつくっていきたい。



辛いときこそ言えない思い

中学校三年

もし、いじめられたとき、誰かに相談することができますか。

私は小学生のとき、いじめに遭いました。私は三年生から学童に通い始めました。入ってすぐ、とても仲の良い友達ができ、毎日二人で遊んでいました。学童にはグループができていて、友達のいるグループに入らせてもらい、グループみんなで遊ぶこともありました。いつものように二人で遊んでいるとグループの一人から、「ずっと二人であそんでるけど、私の友達だから遊ばないで。」と言われました。ですが、友達は気にしなくていい、遊ぼう、という風に言ってくれました。そのため、その後も遊んでいましたが、数日後にグループの人達とその件でもめ、遊ぶ曜日を決めることになりました。その日以降、あからさまに冷たくされたり、無視されたりとグループの人達に避けられているように感じました。私に聞こえるような声で陰口を言われることもありました。ですが、私は怖くて何も言えず、自分が悪いんだという風に自分に言い聞かせていました。誰かに言おうにも信じてもらえなかったらどうしようと思ってしまい、相談することもできませんでした。そしてついに、グループの一人が、私と仲の良かった友達を連れて私に「嫌い。グループの子達もみんな嫌っているから、

これから関わってこないで。」と言われ、仲がいいと思っていた友達にも裏切られました。私がその場で泣いたため、先生たちと話し合いになり、親にも伝えてもらい解決しましたが、このことは今でも覚えています。

酷いいじめではありませんでしたが、この出来事から学んだことは、一度言われたことや心の傷は、そう簡単には消えないということです。五年ほどたった今でも鮮明に覚えています。これは誰しもが知っていることかもしれないですが、だからこそ忘れないでほしいと思います。そして私は、誰かがいじめに遭っているとき、それに気づくことが一番大事だと考えます。誰か一人でも気づくことでその人を守ることに繋がると思います。そして、いじめを少しでも減らすために、自分が気づき、誰かを救うきっかけとなれるよう、この経験を胸に刻んでいきたいです。

天災とマイノリティ

中学校三年　齊藤日菜（さいとうひな）

能登半島地震から半年が経ったなと思っていた時、テレビで能登半島地震の被害にあった障がい者の方たちの特集が放送されていた。それは、どうしたら住み慣れた被災地を離れずに、住み続けられるかという内容だった。

能登半島地震で被災した人のうち、二千人以上の人が、今も各避難所で不便な生活を続けている。その中には障がいのある人も少なくない。それを見た私は、障がいがあっても住み慣れた地域で暮らし続けるための課題について考えた。

避難所となっている石川県のホテルでは七十人程が今も避難生活を送っている。そこでインタビューに答えていた男性は二十年前から視力が低下し続け、今では明るさが分かる程度だと言う。その男性は両親と共に、地震の後はホテルの一室で暮らしていた。兄弟にも障がいがあり、慣れない土地で外出もままならず毎日を過ごしていたそうだ。男性の自宅は建物の形は残っていたが、住むことができない。そこで、被災者向けの県営住宅への入居が決まった。そのホテルが避難所として利用できるのは七月末までだったからだ。しかしその県営住宅と男性の自宅は三キロほど離れている。男性は「町に慣れるための歩行訓練をしたり、身体的なリスクが全く分からなかった

りと不安だらけだ。」と発言していた。

この特集を見るまで私は地震の被害にあった人のなかにいる、支援が必要な人たちの心情を深く考えたことがなかった。ふと、祖母の田舎の隣人のことを思い出した。その人は三十代の頃、事故で片足を失い義足で生活している。祖母の田舎はスーパーもコンビニもなく、生活するには車がないと不便な場所だ。しかし、その人は「自分を支えてくれている、周りの人たちとの関係をも失うことだから、住み慣れた土地を離れるということは本当に不安だ。」と言って、その田舎に住み続けている。南海トラフ巨大地震について注意喚起が発表されている今、これはとても身近な問題だと思った。なぜなら私にも、安心できる家や地域の人の支えがないと不安になると思うからだ。障がいがある人にとってもそれは、死活問題だと思う。

インタビューの最後に男性は、「全国の方に、当事者はいつまでたっても当事者なんだ。被災者なんだ。ということを忘れないでほしい。」と言っていた。中学生の自分に今できることは、「当事者であり、被災者である。」という言葉を忘れず、発信していくことだと思う。

「小さな差別」

中学校三年　大塚理人（おおつかりひと）

世の中の人たちは「差別をなくそう」だとか「人権を守ろう」のような差別絶対ダメという、差別を表面的にしか捉えていないのではないかと思うような言葉をよく放っている。

しかし、私はそのような言い方ではそれを聞いた学生はその理由や経緯を知ろうとせずすぐに差別のことなど頭からはなれてしまうように思ってしまう。こうなってしまうと差別は永遠になくならないと思ってしまう。

そこで私は自分なりにどのようにしたら差別をなくせるかを考えてみた。内容は具体的に二つある。

一つめは、差別の経緯などについて一人一人がよく知ることだ。簡単な例を挙げると「黒人差別」がある。なぜ黒人差別が起こっているか、それは十五世紀に起こった大航海時代にヨーロッパの国々の白人たちが植民地を求めて黒人のいる土地に侵略したときに黒人を奴隷として連れて帰り、売り買いされるようになったことがきっかけで黒人より白人のほうが偉いという風潮が広まり、今でもそれが残ってしまっているからだ。調べていけばこのように差別の経験を知ることができるが果たして今の「差

別はいけないものだ」としか聞かされていない学生たちはそれを知っているだろうか、いや知らないだろう。なのでこのような深い内容まで教えることにより自分で考えるきっかけになり、少しでも差別、人権に対する意識が変わると考える。

二つめは小さな差別をなくすことだ。私は一度だけ外国に行ったことがあるのだが、その時にたくさんの外国人や黒人の方を見たときに無意識に少し怖いと思ってしまったことがあった。このように相手は何もしていないのに偏見や見た目、言語の違いなどで差別をしようと思っていなくても知らぬ間に「小さな差別」をしてしまっていることがある。このようなことをなくすためには、まず外国を深く知り、外国に対する偏見をなくしたり、世界の共通言語である英語を身につけ、外国の人とコミュニケーションをとれるようにすることがやはり大切だと感じた。

これらのことからまず、世界をすぐに変えようとするのではなくてゆっくりでもよいので一人一人の意識を変えていく、そして一人一人が自分で少しでも差別、人権について考えることがすべての人々が笑って過ごせる世界を創る第一歩になると考えた。

親からの花丸

高校二年　瀧野結愛（たきのゆめ）

みなさんに質問です。「どうせ無理。」「こんな自分なんて。」と思うのが癖になってませんか。

私は思っていました。というか、今でも思います。そう思うのはあまり良くないと分かっていてもつい思ってしまいます。なぜなら、親から否定されるのが怖いからです。何か挑戦してみようと思っても、親から「どうせできないよ。」と言われるだろう、だったら、どうせ自分は無理なんだと思ってしまいます。それがどんどん癖になって、思わないようにしてもなかなか抜けられません。親のせいにしたいとかそういうことではなく、親からの発言に全てを否定されているように感じてしまうのです。「どうせ、あなたは無理。」「こんなの出来てあたり前。」など言われると自分に自信がなくなり、自分の事なんてどうでもいいやと思うようになり、ずっと親の言いなりになってしまいます。

子どもからしたら、「あなたなら出来る。」「頑張ってね。」と言われたかっただけなのに、想定外に心をえぐってくる言葉を言われるのです。その気もちが親には分かりますか。親の発言でどれだけ心をえぐられてきたか、分かりますか。もしかしたら、

頑張ってできるようになるかもしれないのに勝手に親から無理と何も根拠もなしに決められる気持ちを考えた事がありますか。それで自分のやりたい事を我慢して親の言いなりになる子も沢山いると思います。それは親から「よく頑張ったね。」と笑顔で言われたいから、自分の気持ちを殺して頑張っているんです。私も実際にそうだったからです。でも、それはとても苦しくて、こんなに頑張ったのに「こんなの出来てあたり前。」と認めてもらえなくて、結局、また、自分の気持ちを殺して頑張ることになります。子どもはただ親に認めてほしかった、自信がほしかっただけなんです。

だから、親にお願いです。子育ては凄く大変かもしれないけれど、子どもはこれからどんどん成長していきます。たくさん失敗したり、出来なかった事が出来るようになったり、自分の気持ちをはっきり言えるようになっていくと思います。そのたびに花丸をあげてほしいです。「よく頑張っているね。」と声をかけてあげて下さい。子どもに「どうせ無理。」「こんな自分なんて。」と思ってほしくないです。どうか、「あなたならやれる。」「自信もって、大丈夫。」と言ってあげて下さい。

「子どものための社会」

成　人

子どもの人権の尊さとその保護は、社会にとって非常に重要な課題です。子どもは未来を担う存在であり、彼らの人権を守ることは、個人の成長だけでなく社会全体の利益にもつながります。子どもが安心して成長できる環境が整うことで、彼らは自らの能力を最大限に発揮し、将来の社会において大きな役割を果たすことができます。逆に、子どもの人権が侵害されると、彼らの成長が妨げられ、社会全体に悪影響を及ぼす可能性があります。

まず、子どもの人権とは何かを理解することが重要です。子どもも一人の人間として、人権を持っています。これには生命、教育、保護などの権利が含まれます。これらの権利は、子どもが健全に成長し、自立した大人へと成長するために必要不可欠なものです。

さらに、子どもの人権教育も非常に重要です。子ども自身が自らの権利を理解し、尊重することで、彼らは自らを守る力を持つことができます。また、人権の大切さを理解することで、彼らが大人になったときに他の子どもを尊重することが期待されます。したがって、学校や家庭での教育を通じて、子どもの権利についての意識を高め

ることが求められます。また、周囲の大人たちも子どもの権利について学ぶことで、適切な支援と保護を提供できるようになります。

そして、子どもの人権を守るためには、私たち一人ひとりの意識と行動が重要です。人権侵害ではないかと思う問題に、子どもの遊び場の減少があります。少子高齢化や都市化の進展に伴い、子どもが自由に遊べる場所が減少しています。遊び場は、子どもの健全な成長と発達に必要であり、社会的スキルを育む場所でもあります。しかし、騒音や安全面の懸念から、子どもの遊びが制約されることも少なくありません。子どもの声が「うるさい」とされ、遊びが禁止されるケースも見られますが、これは子どもの健全な発達に良くない影響を与える可能性があります。

この問題に対処するためには、公共の遊び場や公園を増やし、子どもたちが安心して遊べる環境を整備するだけでなく、地域社会全体で子どもの遊びの重要性を理解し、受け入れる姿勢を持つことが求められます。例えば、地域の自治会が協力して、安全で楽しい遊び場を提供する取組を行うことが考えられます。

最後に、子どもたちが安心して成長できる環境を整えるために、私たちは日常生活の中で彼らの権利を尊重し、支援する努力を惜しまず行うべきです。例えば、子どもに対する暴力を見かけたら、その場で声を上げ、適切な対応をすることが必要です。そのためには、声を上げることが許容される社会を作り上げていく必要があります。

私自身も、このような行動を取ることを意識して日々を過ごすことで、その一助と

なりたいと思います。

私がレインボーパレードで叫ぶわけ

成人　服部（はっとり）　唯（ゆい）

私は現在、小学校で働きながら、大阪の大きなプライドイベント（ＬＧＢＴＱ＋にスポットを当てたイベント）で実行委員をしたり、ＬＧＢＴＱ＋にスポットを当てたファッションショーにモデルとして参加したりしている。大阪だけでなく、各地のプライドイベントでは、どぎついメイク、ジャラジャラの飾り、派手な衣装でイベントを応援したり、パレードでは「当事者は皆さんの身近に居るということを知ってください！」とメガホンを持って叫んでいたりしている。恥ずかしくないかと聞かれれば正直なところ恥ずかしい。恥ずかしさで手も足も汗で濡れる。でも、楽しいし、社会が動いていく瞬間を感じる。

どうしてこんなことをするのかを話そうと思う。私は男として生まれながら、性別に違和感があり、やっと性別適合手術を受けることができた当事者の一人だ。しかし、プライドイベントを知るまでは、私は社会とか世間体の中で、みんなにとって普通の生き方をしようと、自分自身と必死に戦っていた。自分はおかしな人間と自覚しながらも、周囲に違和感を感じさせないように努力していた。女装は、夜中に隠れて行っていたが、体形に合う服も、正しいメイクの知識も手に入れることができなかった。

ある時、オンラインで大きなプライドイベントが行われることを知り、配信を観てみた。当事者がこんなにもイキイキと活動しているのかとまぶしくて涙が出た。ここなら自分を受け入れてもらえると思った。早速大阪の事務局に問い合わせて、実行委員会に加わることにした。最初は母も妻も子どもたちも、家族全員で参加した。そこから自分を取り巻く状況は大きく変わり、仲間ができ、オープンに自分自身の生き方を貫くことができるようになった。メイクスクールに行くことができ、服も自分の着たい服を着られるようになった。ＤＳＤ（性分化疾患）当事者や、ＨＩＶ当事者とも繋がりができ、それぞれの立場で抱えている問題が全く違うことも知ることができた。今では先述のような格好でイベントの司会までしている。

社会は確かに変化している。しかしまだまだ当事者が社会から感じる空気、目線、当事者を包み込んでいる日常生活は変わっていかなければいけないと感じている。小さな無理解や差別が当事者を包み込んでいる現状がある。そんな状況の中、「あんなにやりたい放題の格好で堂々としている存在がある。だから、あなたはあなたで素晴らしい存在なんだよ。カミングアウトしてもしなくても、変わるべきなのは社会の方で、あなたじゃないんだよ。」というメッセージを届けたい。そして非当事者に対しては、今この瞬間も、当事者が身近に居て、日々戦いながら生きているということを少しでも知ってほしい。そんな思いでこれからも私はこの活動を続けていくつもりだ。

「祖父」

成人　山神（やまがみ）　僚介（りょうすけ）

私の祖父は今年八十歳の障碍者です。十年前に脳梗塞で半身不随となり、自宅療養を続けてきました。そして先日、祖父は障碍者施設へ入所することが決まりました。

脳梗塞になる前の祖父はアウトドア派で、キャンプや釣り、ドライブが好きで、小さかった私をよく連れて行ってくれました。また工作も得意でした。私の夏休みの宿題で、掌サイズの木製の飛行機を作る際、私以上に真剣に手伝ってくれたことを覚えています。しかし十年前に脳梗塞となって、祖父は左半身が動かなくなり、話すことも出来なくなりました。キャンプ等の趣味は出来なくなり、一日中テレビを見る様になりました。テレビだけが祖父の唯一の楽しみだったのだと思います。

数年後、祖父は自分でトイレに行くことが難しくなり、同居していた祖母と母が介護する様になりました。しかし、祖母は祖父より五歳年上であり、毎日の家事と介護によって精神的に弱っていきました。また母は仕事と家事に加え、祖父母の通院に追われました。私が実家に帰る際、徐々に雰囲気が悪くなり、愚痴も増えていくことを感じました。そして、母が疲れて倒れたことをきっかけに、祖父の障碍者施設への入居が決まりました。

障碍者施設に入所すると、面会も難しいと聞いていました。祖父との別れの時、私は祖父と握手して「体に気を付けて」と伝えました。テレビが唯一の楽しみだった祖父が、テレビもない障碍者施設でどう過ごすのか、家族と離れて幸せなのかと考えるとそれ以上何も言えませんでした。

介護はされる側とする側の両方から、幸せを奪うものだと感じました。これを避ける方法として何があったのか、具体的にはまだ分かりません。少なくとも大きな労力とお金が必要であったことは確かです。私は今二十八歳ですが、将来自分の家族にそして自分に介護が必要となった時にどうすればよいのか、何が必要なのかそれを考えて、介護で幸せを奪われないように、準備していきたいと思います。

『まずは考えてみた』

成人　大野和隆（おおの かずたか）

私には中学生の息子と小学生の娘がいる。今年も子どもたち・・・いや、保護者にとっても手強い課題「読書感想文」の季節がやってきた。子どもたちに作文を書けと言うより、同じ苦境にある姿を見せる方がやる気になってくれるのではないかという邪な考えを持っていた。そこに目に入った「作文募集」のビラ。それには「応募者全員に参加賞を進呈します。」とも。これはと思い詳細を読むとテーマは「人権」・・・こんなきっかけで取り組んでいいものかと思ったが、ビラに書かれた『「書く」ことを通して「人権」について考えてみませんか』という呼びかけのとおり、まずは「書く」ことから始めてみようと思う。

先述の私の息子は恐竜が好きで、娘は恋愛アニメが好きだ。私が子どもの頃なら中学生にもなって恐竜が好きだなんて恥ずかしい・・・、小学生のくせに恋愛アニメに夢中だなんて生意気な・・・と言われていただろうなと好きなものを好きだと言える今の子どもたちの環境を羨ましく思う。今では恐竜もアニメも日本が世界に誇る立派な文化で、大きな経済効果をも上げている。少し前までは世の中に認められていなかった「らしさ」が今では日本らしさとして世界にも認められている。私たちが若いころ「オ

タク」は負のイメージを含むものだったように思う。むしろ場合によってはそう呼ばれないように自身の趣味嗜好を隠しすらしていた。それが今では世界共通語となり「オタク」であることを自慢できるほどになっている。

「オタク」に限ったことではないが、ある個性に対して特別な呼称が与えられていることがある。性別、出身、年齢、言動・・・そういったカテゴリーが良くも悪くも課題になることも多い。今では広く知られている性的指向の総称「ＬＧＢＴ」を調べるとその種類を表すアルファベットは「ＬＧＢＴ」の四種類では収まらない。何事も理解が深まれば未知の隙間は埋まり、隔たりがなくなりグラデーションの様相が強くなる。だから誰が「Ｌ」で誰が「Ｇ」ということの区別よりもその人の「らしさ」がより一層大切になるのではないかと思う。その人らしくあること・・・そのことに「カミングアウト」という特別な行為の必要性があるのだろうか。

「私、じつはコンタクトやねん。」

と同じ感じで日常の会話の中に

「俺、実はゲイやねん。」

という会話が何の違和感もなくあればいいのにと思う。

「人権」を考える。それは大人にもなると大切なことだとは知っている。ただ「人権」という言葉があまりに意味するところが広く、深いので未だに上手に説明できない。ただ説明できなくても何かをきっかけに誰かのことを「考える」だけでも「人権」を

大切にすることになるのだと作文を書いて分かった。

同和問題に向き合う私たちの責任

成人　宇野（うの）　賢（けん）

私は就職するまで京都に住んでいました。そんな私の故郷である京都には、長い歴史の中で形成された同和問題が存在しています。中学三年生の総合学習の授業で初めて同和問題について学んだ時、私は京都がこの問題に深く関わっていることを知り、大きな衝撃を受けました。同和問題は社会全体の問題であると同時に、私たちの身近な所でも解決すべき課題であることを初めて認識しました。

授業の中で、先生は京都における同和地区の歴史や現状について詳しく説明してくれました。京都は古都としての歴史が長く、伝統や文化が根付いている一方で、歴史的な背景から同和地区が形成され、差別が根深く残っている地域でもあります。今もなお、就職や結婚において差別が続いている現実を知り、私は驚きと同時に強い衝撃を受けました。

その後、私は有志の一員として同和問題に対する意識調査に参加し、街中で生の声を聞く活動を実施しました。調査で話を聞いていると、多くの人が無意識的に、なんとなく同和地区に住む方々を忌み嫌っているということがわかりました。この時、同和問題について正しく理解できていないことが差別を生む最大の原因であることを強

く意識しました。

意識調査の中で特に印象的だったのは、ある同和地区に住む高齢の女性との出会いです。彼女は若いころから差別を受け続け、多くの苦労を経験してきました。彼女の話を聞く中で、私は自分がいかに無知であったかを痛感しました。差別は単なる言葉や行動だけでなく、人々の心に深い傷を残し、未来への希望を奪うものだと知りました。この女性との対話の中で、彼女は「竹田の子守歌」を歌ってくれました。「竹田の子守歌」は、京都の竹田地区に伝わる子守歌で、同和地区の人々が抱える苦しみや悲しみに加えて、子守りをする女性たちの労働の辛さや、彼女たちが受ける差別の現実を表現しています。その歌声から、長い歴史の中で積み重ねられた悲しみを強く感じ、私たちの世代でこの同和問題を必ず根絶させなければならないと強く思いました。

同和問題を根絶するためには、私たちが日常生活の中でできる小さなことから始めることが大切です。例えば、差別的な発言や行動を見かけたら、それを指摘し、正す勇気を持つこと。また、同和問題についての知識を深め、周囲の人々に伝えることで差別に対する理解を広めることができます。これは同和問題に限ったことではなく、みんなが安心して気持ちよく生活するために必要な心掛けであり、意識し続ける必要があると私は思います。

同和問題は、私たち全員が向き合うべき課題です。課題解決に向けては、一人ひとりの意識と行動が重要です。私はこれからも、京都における同和問題に対する理解を

深め、差別のない社会を築くために、小さなことから努力を続けていきたいと思っています。

全ての人が尊重される世の中を目指して

成人　井上憧真（いのうえとうま）

「将来のお嫁さん、どんな人やろな〜。」僕の大好きなおばあちゃんが幸せそうに僕に話す。「どんな女の人がタイプなん？」僕の仲のいい友達は興味津々そうに聞いてくる。こんな何気ない質問の数々が、思い込みが、時に人の心を傷つけているかもしれないことをこの作文を通して皆さんに知ってもらいたい。

人はみな色眼鏡をかけている。人それぞれ育ってきた環境や周りにいた人たちに影響を受けて、物心ついたころから各々の色眼鏡をかけて世の中を見るようになる。同性婚が未だ認められていない日本では、やはりまだ多くの人に異性愛が当たり前のように思われていて、ＬＧＢＴＱに関する話題が活発的に議論されるようになったのはほんのここ最近の話だ。その色眼鏡をいったん外してみてほしい。自分の当たり前を横に置いて、自分に問いかけてほしい。法律によってどれだけその人を愛していたとしても結婚できない残酷さ。世間に、もっとひどい場合は家族、友達に認めてもらえない悔しさ。僕たちＬＧＢＴＱの当事者の人たちは何も多くは望んでいない。ただ多くの人が何の努力もなしに享受するその当たり前の生活を過ごしたいだけだ。みんなと同じように好きな人の話で盛り上がりたい、結婚話に花を咲かせたい、子どもにつ

いて、将来について真剣に考えたい。偏見なく安心して毎日を暮らしたい。たったそれだけだ。

こういう話をしたとしてもいきなり明日から同性婚が合法化されたり、劇的にすべてが変わるとは思わない。しかし、僕の作文を読んで当事者の人たちに勇気を与えられたり、当事者ではない人にもこんな考えがあるということを知ってもらえることで少しでも住みやすい世の中になればいいなと思った。

またこの作文では同性婚について、ＬＧＢＴＱの方たちへの理解について取り扱ったがそのほかの人権問題を考えるときにも大事な考え方が一つある。それはどんな時でも自分目線だけではなく、他の人の立場に立って、様々な視点から物事を見ることだ。冒頭にも触れた色眼鏡は人間なら誰しも持っているものだ。しかし、たかが眼鏡だ。かけたり外したりできる。もしも自分と違う人と出会ったとき、自分とは違うと一蹴するのではなく、一度その人の立場に立って考えてみてほしい。その少しの気遣いがやがて自分の周りにいる人に、そしてその周りにいる人に広がっていって、やがて大きな花を咲かせるだろう。そんな輝かしい未来が訪れることを僕は、僕たちは心より願っている。

選考にあたって

今年度で四十五回目となる「わたしからの人権メッセージ」には今回、五千三百六十一点ものご応募をいただきました。審査員を代表して、メッセージをお寄せいただいた皆様に心からお礼申しあげます。応募作品はいずれも、人権の尊さ、お互いの人権を守ることの大切さ等を懸命に考えていただいたことが直接に伝わるものばかりでした。

特選作品を選ぶ審査会では、人権テーマについての正しい理解、社会や世界の人権課題の解決に向けて「自分はどうあるべきか」、また「人権が尊重される世の中にしていくことを訴える内容か」、などに焦点をあてて、特選二十点、入選三十点を選考いたしました。

この「わたしからの人権メッセージ」の特長は、小学一年生からご高齢の方まで、それぞれの年齢において、さまざまなテーマの「人権メッセージ」が自分の言葉で書かれている点です。特に、今年度の応募作品には平和をテーマにしたものが多く見られました。ロシア政府によるウクライナへの軍事侵攻について、自分と同世代の子どもが命を奪われ、苦しみおびえる姿に心を痛め、平和を願う心が丁寧に書かれていました。また、堺大空襲について学校で学び、「平和な世の中をつくるために周りの友だちと仲良くしたい」と決意を表す作品もありました。その他、魚の体内からプラスチッ

クが見つかったというニュースを見て、海洋汚染について考えたものや、自分や家族が新型コロナウイルスに感染した時、不安を抱えて学校に行ったら温かい言葉がけや優しい気遣いを感じて、病気を理由に差別はいけないという思いを強くした体験、同姓を好きになることも肯定的にとらえることの大切さを訴えたものなど、多岐にわたるテーマのメッセージが見受けられました。

人権問題を考えるうえで大切なことは、「自分のこと」として考え、さらに「一歩を踏み出す」ことだと考えます。この特選作品集には、人権課題を主体的に考え、行動することを自分の言葉で書かれた素晴らしい作品が綴られています。

最後に、この冊子を通して、多くの方々が、人権について新たな気づきや行動の変化につながり、ひいては人権尊重の社会が実現していくことを期待申しあげます。

審査員長　柏　原　秀　和
（堺市人権教育推進協議会 副会長）

第45回わたしからの人権メッセージ（2024年度）　応募作品テーマ内訳表　【応募数】

テーマ ＼ 学年等	小学校		中学校			高等学校/大学	一般	分野別合計
	低学年	高学年	1年	2年	3年			
同　和	0	246	35			3	4	288
女　性	1	33	60			17	11	122
障がい者	2	45	227			46	8	328
外国人	0	31	156			34	22	243
子ども	2	64	127			20	7	220
高齢者	1	10	62			7	12	92
LGBTQ	0	24	111			20	10	165
平　和	378	1081	537			41	15	2052
環　境	6	71	50			6	8	141
感染症	0	7	131			8	4	150
犯罪被害者やその家族	0	20	20			6	1	47
インターネット	1	85	210			40	32	368
その他の人権	35	130	578			370	32	1145
年代別応募数	426	1847	2304			618	166	5361

【今年度応募作品の傾向について】

○テーマ別の応募数では、「平和」がテーマの作文が多く、全体の約40％になりました。小中学校で行った平和学習について書かれた作品が多くありました。

○「インターネット」がテーマの作文も多く寄せられました。自分たちにとって身近な存在であるインターネットは、匿名性が高い故、気軽に人を傷つける投稿をしてしまう危険性があること、また使い方を間違えると、人を死に追いやることもあるということも書かれていました。

○「LGBTQ」がテーマの作文については、性別による決めつけに着眼したものや性別役割分担に関する大人の発言を疑問視するもの、心と体の性別が違う人に対しての偏見や差別をなくし、ともに生きることの大切さを訴える作品が多く見られました。

○作文の主張として、一人ひとりは違う人間であり、全く同じ人間は存在しない。そのため、考え方などが違ってあたり前ということ。違いを批判したり、攻撃したりすることなく、お互いを認め合える社会の実現をめざしたいということが多く書かれていました。

御応募いただいた学校その他団体名

※5年以上連続で応募があった学校や団体には、☆印をつけています。

【小学校】

☆浅香山小学校
☆市小学校
☆榎小学校
大泉小学校
鳳小学校
金岡南小学校
神石小学校
☆北八下小学校
錦西小学校
光竜寺小学校
五箇荘東小学校
白鷺小学校
☆城山台小学校
新金岡東小学校
新湊小学校
☆泉北高倉小学校
大仙小学校
竹城台小学校
登美丘西小学校
登美丘東小学校
☆錦小学校
☆庭代台小学校
野田小学校
土師小学校
八田荘小学校
☆浜寺小学校
浜寺石津小学校
☆浜寺東小学校
原山ひかり小学校
☆東陶器小学校
東浅香山小学校
東深井小学校
☆東三国丘小学校
東百舌鳥小学校
日置荘西小学校
平岡小学校
☆福泉小学校
福泉上小学校
槇塚台小学校
美原北小学校
三原台小学校
向丘小学校
八下西小学校
安井小学校
熊野小学校

【中学校】

赤坂台中学校
浅香山中学校
☆上野芝中学校
☆大泉中学校
☆金岡北中学校
☆金岡南中学校
五箇荘中学校
さつき野中学校
☆津久野中学校
☆殿馬場中学校夜間学級
中百舌鳥中学校
庭代台中学校
八田荘中学校
浜寺中学校
原山台中学校
☆晴美台中学校
日置荘中学校
☆平井中学校
深井中央中学校
福泉中学校
福泉南中学校
☆美木多中学校
南八下中学校
☆美原中学校
八下中学校
☆陵西中学校
陵南中学校

【高校・団体】

農芸高校
☆大阪商業大学堺高等学校
☆だいせん聴覚高等支援学校
堺リベラル高等学校
堺看護学校
堺識字・多文化共生学級「つどい」
☆堺自由の泉大学
☆(株)クボタ堺製造所
(株)クボタグローバル技術研究所

たくさんの御応募ありがとうございました。

第45回「わたしからの人権メッセージ」審査員

大　井　敦　史	堺公共職業安定所　管理部長
大町　むら子	堺市人権教育推進協議会　副会長
柏　原　秀　和	堺市人権教育推進協議会　副会長
髙　橋　淳　子	堺市総務局人事部人事課　参事
靏　原　隆　司	堺市人権教育推進協議会　常任幹事
平　井　純　子	堺市人権教育研究会　事務局
藤谷　理津子	堺市教育委員会事務局　生徒指導課 指導主事
渡　邊　　敬	堺労働基準監督署　副署長

＜敬称略・五十音順＞

第45回わたしからの人権メッセージ
特選作品集

2024年12月発行

編集・発行　堺市人権教育推進協議会
〒590-0078 堺市堺区南瓦町3番1号
堺市人権推進課内
電話 072-221-9280
FAX 072-228-8070

私たちのまち堺から
人権文化の花を咲かせよう

この特選作品集は、「第45回わたしからの人権メッセージ」に応募された
5361点の作品のうち、特選作品20点を掲載したものです。